

長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象

有元光彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs
in the Shimabara Peninsula Dialects of Nagasaki Prefecture

Mitsuhiko ARIMOTO

(Received September 29, 2006)

0. はじめに¹

本稿の目的は、長崎県島原半島の諸方言を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この形態音韻現象とは、有元光彦(2005a)等で言うところの「テ形現象」である。有元光彦(2005a)によると、テ形現象は次のように定義されている。

(1) テ形現象：

共通語の「テ」に相当する部分に、動詞の種類によって、促音や撥音が現れたり現れなかったりする形態音韻現象を指す。

例えば、ある方言△において、〈書いてきた〉を[kakkita]というように、共通語の「テ」に相当する部分に促音が現れるとする。一方、〈取ってきた〉は*[tokkita]とは言えず、[tottekita]という[te]が現れる形しか存在しないとする。このような場合、方言△はテ形現象を持つと言う。テ形現象は形態音韻現象の総称であるので、様々な下位タイプが存在する。大きく言って、「真性テ形現象」「非テ形現象」「全体性テ形現象」「擬似テ形現象」の4タイプに分けられる。

本稿では、島原半島諸方言にも周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか、存在するとしたらどのタイプを示すか、さらにこのタイプが周辺地域のテ形現象のタイプとどのような関連性があるか、について分析する。また、先行文献である有川郁代(2001)・有元光彦(2001b)も参照しつつ、島原半島諸方言全体を観察する。

1. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論(Generative Phonology)の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形(underlying form)に音韻ルール(phonological rule)が線的(linear)に適用されることによって、音声形(phonetic form)が派生される。² 音韻ルールはそれぞれ適用領域(ap-

1 本稿の一部は、平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(研究代表者：有元光彦・No.16520281)によるものである。フィールドワークにおいては、島原市・深江町・加津佐町・国見町の各教育委員会に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

2 以下、基底形は記号/ /で、音声形は記号[]でそれぞれ括る。

plicational domain)を持っている。基底形は、心内辞書(mental lexicon)に登録されている辞書項目が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成(基底形)は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞:

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など

b. 母音語幹動詞:

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など

c. 不規則語幹動詞:

/i/~ /itate/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。テ形接辞の直後には、様々な単語が続く。例えば、[kita]<(～て) きた>, [ke:]<(～て) こい>, [mire]<(～て) みる>, [kure]<(～て) くれ>, [kurenna]<(～て) くないか>等である。

2. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成18(2006)年3月にフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、島原市千本木地区・島原市みなみたかき(旧南高来郡)有明町・南島原市(旧南高来郡)深江町・南島原市(旧南高来郡)加津佐町・雲仙市(旧南高来郡)国見町・雲仙市(旧南高来郡)南串山町である。

データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?は少し奇妙な言い方であると回答したものであることを、記号&はインフォーマントによって適格性の判断に揺れがあることをそれぞれ表す。記号()は、その音声任意であることを表す。

また、本稿では語幹末分節音が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。母音語幹動詞においては、語幹の音節数が1音節であるi語幹動詞を「i1語幹動詞」、2音節以上であるi語幹動詞を「i2語幹動詞」、1音節であるe語幹動詞を「e1語幹動詞」、2音節以上であるe語幹動詞を「e2語幹動詞」とそれぞれ呼ぶ。

3. 分 析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形現象のタイプを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。初出の語幹がある場合には、その都度注で説明する。

3. 1. 島原市方言

本節では、島原市の千本木地区・有明町方言のテ形現象を観察する。動詞テ形のデータを【表1】に挙げる。

【表1】

語幹	千本木地区	有明町	意味
kaw<買う>	ko:fikita	ko:fikita	買って来た
tob<飛ぶ>	to:fikita to:çikita	to:fikita	飛んできた
jom<読む>	jondekita *jo:fikita	jo:fikita	読んで来た
kas<貸す>	kja:fikita	ke:fikita katfikita	貸して来た
kak<書く>	kja:fikita	ke:fikita	書いて来た
kog<漕ぐ>	koidekita *ke:fikita	ke:fikita	漕いで来た
tor<取る>	tottekita *totfikita	tottekita *totfikita	取って来た
kat<勝つ>	mattekurenahe ³ *matfikurenahe	kattékita *katfikita	勝って来た
sin<死ぬ>	findekure *finfikure	findekurena *finfikurena	死んでくれないか
mi<見る>	mitékita *mifíkita	mi:fíkita	見て来た
oki<起きる>	okittekita *okitfikita	okitfikita	起きて来た
de<出る>	detékita *defíkita	detékita *defíkita	出て来た
uke<受ける>	uke:fíkita	uketfikita	受けて来た
i~it<行く>	itekita *itfikita	itfikita	行って来た
ki<来る>	kitemire *kifimire	kifiminne:	来てみないか
s<する>	sitekita *sifíkita	sifíkita	して来た

テ形現象を分析する観点、共通語の「テ」に相当する部分に現れる音声の種類とその分布である。分かりやすくするために、「テ」に相当する部分に現れる音声を【表2】に示す。

【表2】

語幹	千本木地区	有明町
kaw<買う>	fi	fi
tob<飛ぶ>	fi	fi
jom<読む>	de	fi
kas<貸す>	fi	fi
kak<書く>	fi	fi

3 <待ってくれないか>の意。語幹は/mat/<待つ>である。

kog<漕ぐ>	de	ʃi
tor<取る>	te	te
kat<勝つ>	te	te
sin<死ぬ>	de	de
mi<見る>	te	ʃi
oki<起きる>	te	ʃi
de<出る>	te	te
uke<受ける>	ʃi	ʃi
i~it<行く>	te	ʃi
ki<来る>	te	ʃi
s<する>	te	ʃi

【表2】を観察すると、両方言とも「テ」に相当する部分には[ʃi]が現れている。しかし、[ʃi]はすべての語幹に現れるのではなく、動詞の種類によって異なっている。この分布は有元光彦(2005a)で言うところの「真性テ形現象方言」と同じであることから、両方言は「擬似テ形現象方言」であると言える。[ʃi]の分布は、テ形現象の場合、[ʃi]が現れないときの動詞語幹末分節音をもって表すので、次のようになる。

- (3) a. 千本木地区方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が/m, g, r, t, n, i1, i2, e1/のときである。
 b. 有明町方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が/r, t, n, e1/のときである。

ここで、母音語幹動詞の場合はいわゆる「r語幹化（ラ行五段化）」の問題が関わってくる。母音語幹動詞の語幹がr語幹化しているかどうかを確かめるために、両方言の母音語幹動詞の否定形を【表3】に挙げる。

【表3】

語幹	千本木地区		有明町	
mi<見る>	miN *miran	mita *mitta	miN *miran	mita *mitta
oki<起きる>	*okin okiran	okitta	okin okiran	okitta
de<出る>	deN *deran	deta *detta	deN *deran	deta *detta
uke<受ける>	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa uketta

【表3】から分かるように、千本木地区方言では/oki/<起きる>はr語幹化して/okir/となっているが、他の語幹はr語幹化していない。有明町方言では、/oki/<起きる>、/uke/<受ける>はr語幹化が任意のようである。他の語幹ではr語幹化していない。r語幹化しているということは、その語幹が/tor/<取る>等と同じr語幹動詞であるということなので、(3)の

分布の記述を簡潔にすることができるが、【表3】を見る限りでは、活用形によってr語幹化の分布が異なるとしか言えない。そこで、(3)の記述を簡潔にするために、(3)に挙がっている母音語幹動詞はテ形においてr語幹化していると考えておこう。従って、(3)は(4)のように書き換えることができる。

- (4) a. 千本木地区方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が/m, g, r, t, n/のときである。
 b. 有明町方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が/r, t, n/のときである。

(4)で挙げた語幹末分節音の集合は弁別素性(distinctive feature)で表すことができるので、(4)は(5)のようになる。⁴

- (5) a. 千本木地区方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が $\{-syl, +cor, -cont\}, [+nas], [+voice, +back\}$ のときである。
 b. 有明町方言：「テ」に相当する部分に[ʃi]が現れない場合は、動詞語幹末分節音が $\{-syl, +cor, -cont\}$ のときである。

従来の筆者の研究では、(5)の弁別素性の集合を利用して、擬似テ形現象の中心的なルールである「テ形接辞e/i交替ルール」を次のように仮定した。

- (6) テ形接辞e/i交替ルール：
 語幹末分節音がXAでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、
 テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。
 XA=/r, t, n/

有元光彦(2004a)では、このルールを長崎県雲仙市(旧南高来郡)小浜町・千々石町^{ちぢわ}方言に仮定している。有明町方言にも同じルールを設定できる。従って、例えば[ko:ʃikita]〈買って来た〉の派生過程(derivational process)は次のようになる。

- (7) 基底形： /kaw + te # ki + ta/
 ↓ ← テ形接辞 e/i 交替ルール
 kaw + ti # ki + ta
 ↓ ← 音便ルール⁵

4 本稿で扱う弁別素性は、[syl(lable)](音節主音性)、[cor(onal)](舌頂性)、[cont(inuant)](継続音性)、[nas(al)](鼻音性)、[voice](有声音性)、[back](後舌性)、[lab(ial)](唇音性)である。

5 「音便ルール」とは、動詞語幹の直後に、形態素境界(+)を挟んで、/t/で始まる活用接辞が続く場合、語幹末尾の母音と語幹末子音を融合させるルールである。有元光彦(2004a)ではこのルールを個別にリストアップしているだけであるが、おおよそ語幹/…[+syl, +back][-syl, +lab]/が/…o(o)/または/…u(u)/になる。

koo + ti # ki + ta
 ↓
 [ko:ʃikita]

以上より、有明町方言は「擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言」である。

一方、千本木地区方言では(6)の XA を次のように変えなければならない。

(8) テ形接辞 e/i 交替ルール：

語幹末分節音が XD' でない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、
 テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。

$XD' = \{[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+voice, +back]\}$

(8)において「XD'」としたのは、この条件が真性テ形現象方言のタイプ D 方言における「e 消去ルール」の適用条件と類似しているからである。タイプ D 方言の e 消去ルールは次のように仮定されている。

(9) e 消去ルール (タイプ D 方言)：

語幹末分節音が XD でない動詞語幹に、テ形接辞/te/が続く場合、
 テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

$XD = /m, r, t, n/ = \{[-syl, +cor, -cont], [+nas]\}$

ここから分かるように、XD'は XD に集合[+voice, +back]を和 (union) 演算したものである。従って、千本木地区方言がもし仮に真性テ形現象方言であるとすると、タイプ D 方言のいわゆる“亜種”の可能性はある。しかし、実際は擬似テ形現象方言である。従って、適用領域が XD'であるテ形接辞 e/i 交替ルールを持つ擬似テ形現象方言であるという意味で、千本木地区方言を「タイプ PD'方言」としておく。

3. 2. 南島原市方言

本節では、南島原市の深江町・加津佐町方言のテ形現象を観察する。テ形のデータを【表 4】に挙げる。【表 4】ではインフォーマントによる違いが大きいため、各地域<a>、 2 名ずつのデータを挙げている。

【表 4】

語幹	深江町		加津佐町		意味
	<a>		<a>		
kaw <買う>	ko:ʃikita	ko:ʃikita	ko:ʃikita	ko:ʃikita koçikita	買って きた
tob <飛ぶ>	to:ʃikita	to:ʃikita	to:ʃikita	to(:)ʃikita toçikita	飛んで きた

jom <読む>	jo:ʃikita	jo:ʃikita	jondekita *jo:ʃikita	jo:ʃikita *joçikita	読んできた
kas <貸す>	kja:ʃikita	kja:ʃikita	kaʃitekita *kja:ʃikita okeʃikita ⁶	kja:ʃikita kjaçikita	貸してきた
kak <書く>	kja:ʃikita	kja:ʃikita	kaitekite *kja:ʃikita	kja:ʃikita kja:çikita	書いてきた
kog <漕ぐ>	koitekita koidekita *ko:ʃikita	koitekita koidekita ko:ʃikita	koidekita *ke:ʃikita ojoidekita ⁷ *ojo:ʃikita	koidekita *ke:ʃikita oe:ʃikita ⁸	漕いできた
tor <取る>	tottekita *totʃikita	tottekita *totʃikita	tottekita *totʃikita	tottekita *totʃikita	取ってきた
kat <勝つ>	kattekita *katʃikita	kattekita *katʃikita	kattekita *katʃikita	kattekita *katʃikita	勝ってきた
sin <死ぬ>	ʃindekure *ʃinʃikure	ʃindekureнна *ʃinʃikureнна	ʃindekure *ʃinʃikure	ʃindekureнна *ʃinʃikureнна	死んでくれないか
mi <見る>	mitekita *miʃikita	miʃikita	mitekita *miʃikita	mitekita *miʃikita	見てきた
oki <起きる>	okitekita *okiʃikita	okitekita ?okiʃikita okiʃikure	okitekita *okiʃikita	okitekita *okiʃikita	起きてきた
de <出る>	detekita *deʃikita	detekita *deʃikita	detekita *deʃikita	detekita *deʃikita	出てきた
uke <受ける>	ukeʃikita	ukeʃikita	uketekita *ukeʃikita	ukeʃikita ukeçikita	受けてきた
i~it <行く>	itekita *itʃikita	itekita *itʃikita	itekita *itʃikita	itekita *itʃikita	行ってきた
ki <来る>	kitemitekureŋka *kiʃimitekureŋka	kiteminna *kiʃiminna	kitemire *kiʃimire	kiteminna *kiʃiminna	来てみないか
s <する>	ʃitekita *ʃiʃikita	ʃitekita *ʃiʃikita	ʃitekita *ʃiʃikita	ʃitekita *ʃiʃikita	してきた

【表4】から「テ」に相当する部分に現れる音声を抜き出してまとめると、【表5】のようになる。

【表5】

語幹	深江町		加津佐町	
	< a >	< b >	< a >	< b >
kaw<買う>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi/çi
tob<飛ぶ>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi/çi
jom<読む>	ʃi	ʃi	de	ʃi
kas<貸す>	ʃi	ʃi	te/ʃi	ʃi/çi

6 <起こしてきた>の意。語幹は/okos/<起こす>である。

7 <泳いできた>の意。語幹は/ojog/<泳ぐ>である。

8 <泳いできた>の意。語幹は/oeg/<泳ぐ>である。

kak<書く>	fji	fji	te	fji/çi
kog<漕ぐ>	de	fji	de	de/fji
tor<取る>	te	te	te	te
kat<勝つ>	te	te	te	te
sin<死ぬ>	de	de	de	de
mi<見る>	te	fji	te	te
oki<起きる>	te	fji	te	te
de<出る>	te	te	te	te
uke<受ける>	fji	fji	te	fji/çi
i~it<行く>	te	te	te	te
ki<来る>	te	te	te	te
s<する>	te	te	te	te

【表5】から分かるように、まず「テ」に相当する部分の音声としては、深江町方言では[te],[de],[fji]が、加津佐町方言では[te],[de],[fji],[çi]がそれぞれ現れている。テ形現象を分析するためには[te],[de]の分布が鍵となるので、それをインフォーマントごとにまとめると次のようになる。

(10) 深江町方言：

<a>：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/g, r, t, n, il, i2, el/のときである。

：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/r, t, n, el/である。

(11) 加津佐町方言：

<a>：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/m, k, g, r, t, n, il, i2, el, e2/のときである。

：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/r, t, n, il, i2, el/である。

母音語幹動詞についてはr語幹化が問題となるが、ここでは省略するので、子音語幹動詞だけを弁別素性で表すと、(10),(11)はそれぞれ(12),(13)のように書き換えることができる。

(12) 深江町方言：

<a>：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[[-syl, +cor, -cont],[+voice, +back]]のときである。

：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]である。

(13) 加津佐町方言：

<a>：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[[-syl, +cor, -cont],[+nas],[+back]]のときである。

：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]である。

(12),(13)から分かるように、まず深江町方言と加津佐町方言は有明町方言と同じ「擬似テ形現象方言のタイプPA方言」である。次に、深江町方言<a>であるが、この方言は擬似テ形現象方言であることには違いない。しかし、従来の筆者の調査では見られなかったタイプで

ある。有明町方言のルール(6)の XA に集合[+voice, +back]が和演算したものであるので、「タイプ PA'方言」(タイプ PA 方言の“亜種”)としておく。最後に加津佐町方言<a>であるが、島原市千本木地区方言と類似している。しかし、ルール(8)とは一部分だけ異なるルールを持っている。加津佐町方言<a>ではルール(8)の XD'から[+voice]を取り除いたルールを持っている。従って、厳密には千本木地区方言とは区別して「タイプ PD'方言」としておく。

【表5】でもう一つ注目すべき点は、加津佐町方言における[çi]の分布である。[çi]は[fi]が現れるところにしか現れていないので、音声的に[fi]のバリエーションのように見える。しかし、[fi]が現れているからといって必ずしも[çi]が現れているわけではない。[çi]の分布は次の通りである。

(14) 加津佐町方言：

：[çi]が現れない場合は、語幹末分節音が/m, g, r, t, n/のときである。⁹

これは何を意味するのであろうか。加津佐町方言は前述のように擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言である。しかし、(14)を見る限りでは、タイプ PD'方言を想起させる。これはおそらく「共生」タイプであろう。タイプ PA 方言としては、「テ」に相当する部分に[fi]が現れ、一方タイプ PD'方言としては、「テ」に相当する部分に[çi]が現れるのである。

“共生”タイプは、他には熊本県天草地域の維和方言だけに見つかっている (cf. 有元光彦 (2005b))。維和方言は、「真性テ形現象方言のタイプ B 方言」と「擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言」の“共生”タイプである。2方言しか発見されていないので、明らかなことは不明であるが、“共生”タイプの性質として、次のようなことが言えよう。

(15) “共生”タイプの性質：

タイプ ti 方言とタイプ tj 方言が“共生”しているとすると、

- a. ti と tj では、「テ」に相当する部分に現れる音声の種類が異なる。
- b. tj が持つコアルールの適用領域 Xj は、ti が持つコアルールの適用領域 Xi の真部分集合である。→Xj ⊂ Xi
- c. tj は ti よりも非テ形現象化が進行している。→ti > tj

加津佐町方言を例にとると、タイプ ti 方言がタイプ PA 方言、タイプ tj 方言がタイプ PD'方言に相当する。「テ」に相当する部分に現れる音声の種類は、タイプ PA (ti) 方言で[fi]、PD' (tj) 方言で[çi]であるので、異なっている。次に、タイプ PD' (tj) 方言が持つコアルールの適用領域 Xj は「XD'={[-syl, +cor, -cont],[+nas],[+voice, +back]}ではない分節音集合」(XD'°={/w, b, s, k/})、タイプ PA (ti) 方言が持つコアルールの適用領域 Xi は「XA={[-syl, +cor, -cont]}ではない分節音集合」(XA°={/w, b, m, s, k, g/})であるので、Xj ⊂ Xi という関係が成立する。¹⁰ もちろん、コアルールはこの場合テ形接辞 e/i 交替ルールである。さらに、非テ形現象化はタイプ PA (ti) 方言よりもタイプ PD' (tj) 方言が進行しているので、ti > tj という歴史的変化を仮定できる。(15)が言及していることは、ある方言タイプと、それより非テ形現象化が進んだ方言タイプとが“共生”する、ということである。さらには、「ある方言タイプ」と

9 煩雑さを避けるために、母音語幹動詞の分布は省略する。

10 「XA°」などの上付きの記号 c は、補集合(余集合)であることを表す。

は最も安定性のある XA=[-syl, +cor, -cont]を適用領域の中に持つ方言タイプである可能性が高い。ただ、歴史的変化に関しては依然不明な点も多く、また“共生”タイプも2方言しか見つかっていないので、(15)は現時点では暫定的である。

3. 3. 雲仙市方言

本節では、雲仙市（旧南高来郡）の国見町（^{たいら}多比良・^{こうじろ}神代）・南串山町方言のテ形現象を観察する。【表6】に動詞テ形のデータを挙げる。

【表6】

語幹	国見町		南串山町	意味
	多比良	神代		
kaw<買う>	ko:fikita ko:çikita	ko:fikita	ko:fikita	買って来た
tob<飛ぶ>	to:fikita	to:fikita	to:fikita	飛んできた
jom<読む>	jo:fikita	jo:fikita	jo:fikita	読んできた
kas<貸す>	ke:fikita ke:çikita	kja:fikita	kja:fikita	貸してきた
kak<書く>	ke:fikita kai:fikita ke:çikita	kja:fikita kja:çikita	kja:fikita	書いて来た
kog<漕ぐ>	koifikita &ke:fikita	ke:fikita	ko:fikita	漕いできた
tor<取る>	tottekita &totfikita	tottekita *totfikita	tottekita *totfikita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita &katfikita	kattekita *katfikita	kattekita *katfikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	findekure *finfikure	findekuuro *finfikuro	findekurenna *finfikurenna	死んでくれないか
mi<見る>	mittekita *miffikita	mittekita *miffikita	miffikita	見て来た
oki<起きる>	oki(t) tekita &oki(t) fikita	oki(t) tekita *okitfikita	okiffikita	起きて来た
de<出る>	detekita *deffikita	detekita *deffikita	deffikita	出て来た
uke<受ける>	ukefikita	uketekita *ukefikita	ukefikita	受けて来た
i~it<行く>	itekita *itfikita	itekita *itfikita	itekita ?iffikita	行って来た
ki<来る>	kiteminanse *kifiminasen	kitemiro *kifimiro	?kifiminna	来てみないか
s<する>	sitekita *siffikita	sitekita *siffikita	sitekita *siffikita	してきた

【表6】から「テ」に相当する部分に現れる音声を抜き出してまとめると、【表7】のようになる。

【表7】

語幹	国見町		南串山町
	多比良	神代	
kaw<買う>	fɪ/çɪ	fɪ	fɪ
tob<飛ぶ>	fɪ	fɪ	fɪ
jom<読む>	fɪ	fɪ	fɪ
kas<貸す>	fɪ/çɪ	fɪ	fɪ
kak<書く>	fɪ/çɪ	fɪ/çɪ	fɪ
kog<漕ぐ>	fɪ	fɪ	fɪ
tor<取る>	te/&fɪ	te	te
kat<勝つ>	te/&fɪ	te	te
sin<死ぬ>	de	de	de
mi<見る>	te	te	fɪ
oki<起きる>	te/&fɪ	te	fɪ
de<出る>	te	te	fɪ
uke<受ける>	fɪ	te	fɪ
i~it<行く>	te	te	te/?fɪ
ki<来る>	te	te	te/?fɪ
s<する>	te	te	te

【表7】から分かるように、まず「テ」に相当する部分の音声としては、国見町方言では[te],[de],[fɪ],[çɪ]が、南串山町方言では[te],[de],[fɪ]がそれぞれ現れている。テ形現象を分析するために[te],[de]の分布をまとめると次のようになる。

(16) 国見町方言：

- a. 多比良方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/r, t, n, i1, e1/のときである。
- b. 神代方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/r, t, n, i1, i2, e1, e2/のときである。

(17) 南串山町方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が/r, t, n/のときである。

母音語幹動詞を保留すると、語幹末分節音を次のように弁別素性で表すことができる。

(18) 国見町方言：

- a. 多比良方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]のときである。
- b. 神代方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]のときである。

- (19) 南串山町方言：[te],[de]が現れる場合は、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]のときである。

多比良方言では、r, t 語幹動詞の場合の適格性に揺れが生じているが、おそらく「擬似テ形現象方言のタイプ PA 方言」であると考えられる。神代方言及び南串山町方言も同じタイプである。

ところで、【表7】から分かるように国見町方言では、加津佐町方言と同様、[çi]が現れている。多比良方言では、[çi]が現れるのは語幹末分節音が/w, s, k/のときである。しかも、神代方言では語幹末分節音が/k/のときにしか現れていない。加津佐町方言よりも[çi]の現れる範囲が狭いのであるが、果たしてこれは“共生”タイプの名残なのであろうか、現時点では明らかではない。

4. 比較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形現象を比較する。まず、「テ」に相当する部分に現れる音声を再度まとめてみる。

【表8】

語幹	千本木地区	有明町	深江町		加津佐町		国見町		南串山町
			<a>		<a>		多比良	神代	
kaw<買う>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi/çi	ʃi/çi	ʃi	ʃi
tob<飛ぶ>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi/çi	ʃi	ʃi	ʃi
jom<読む>	de	ʃi	ʃi	ʃi	de	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi
kas<貸す>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	te/ʃi	ʃi/çi	ʃi/çi	ʃi	ʃi
kak<書く>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	te	ʃi/çi	ʃi/çi	ʃi/çi	ʃi
kog<漕ぐ>	de	ʃi	de	ʃi	de	de/ʃi	ʃi	ʃi	ʃi
tor<取る>	te	te	te	te	te	te	te/&ʃi	te	te
kat<勝つ>	te	te	te	te	te	te	te/&ʃi	te	te
sin<死ぬ>	de	de	de	de	de	de	de	de	de
mi<見る>	te	ʃi	te	ʃi	te	te	te	te	ʃi
oki<起きる>	te	ʃi	te	ʃi	te	te	te/&ʃi	te	ʃi
de<出る>	te	te	te	te	te	te	te	te	ʃi
uke<受ける>	ʃi	ʃi	ʃi	ʃi	te	ʃi/çi	ʃi	te	ʃi
i~it<行く>	te	ʃi	te	te	te	te	te	te	te/?ʃi
ki<来る>	te	ʃi	te	te	te	te	te	te	te/?ʃi
s<する>	te	ʃi	te	te	te	te	te	te	te

【表8】及び前節の記述から分かるように、本稿で扱った島原半島諸方言はすべて擬似テ形現象方言である。下位の方言タイプとしては、次のような4タイプが観察された。

- (20) 島原半島諸方言の下位タイプ：

a. タイプ PA 方言： 有明町・深江町・加津佐町・国見町多比良・

国見町神代・南串山町

- b. タイプ PA'方言： 深江町<a>
- c. タイプ PD'方言： 千本木地区・加津佐町
- d. タイプ PD''方言： 加津佐町<a>

また、これら4つの下位タイプは(6)のようなテ形接辞 e/i 交替ルールを持っているが、その適用領域の中の XA に当たるものは、以下のように方言によって異なる。¹¹

(21) テ形接辞 e/i 交替ルールの適用領域：

- a. タイプ PA 方言： XA=[-syl, +cor, -cont]
- b. タイプ PA'方言： XA'=[[-syl, +cor, -cont],[+voice, +back]]
- c. タイプ PD'方言： XD'=[[-syl, +cor, -cont],[+nas],[+voice, +back]]
- d. タイプ PD''方言： XD''=[[-syl, +cor, -cont],[+nas],[+back]]

(21b,c,d)はいわゆる“亜種”として位置付けたが、ここには次のような「音節数条件」が関わるかもしれない (cf. 有元光彦(2000,2004a))。

(22) 音節数条件：1音節語幹の場合は排除される。

1音節語幹の場合には、(6)のような交替ルールは適用されないというものである。この音節数条件は、従来の筆者の研究では真性テ形現象方言に適用されるものであったが、擬似テ形現象方言にも同様に適用されることが判明したことになる。歴史的には、音節数条件は非テ形現象化の表れである。即ち、音節数条件を持つ“亜種”は、音節数条件を持たない本来の“種”よりも非テ形現象化が進行しているのである。タイプ PA'方言はタイプ PA 方言よりも非テ形現象化が進んでいる。また、タイプ PD'方言はタイプ PA'方言よりも、さらにタイプ PD''方言はタイプ PD'方言よりも非テ形現象化が進行していると考えられる。この動態は、有元光彦(近刊)で仮定した「非テ形現象化の指向性 β 」で説明されるものである。この指向性を次に挙げておく。

(23) 非テ形現象化の指向性 β ：

非テ形現象化は、積集合演算ではそれに関わる弁別素性の指定の数を減らす方向へと変化する。和集合演算では新たな弁別素性を付加する方向へと変化する。

(23)は、e消去ルールの適用領域を縮小する方向へと変化することを意味するものである。これは、加津佐町方言のような“共生”タイプにも適用できる。(15)は汎用性のある(23)によって説明できるので、仮説としてある意味サポートされたことになる。

本稿で扱った以外の島原半島方言に関しては、有川郁代(2001)によると、南島原市(旧南高来郡)西有家町・北有馬町・南有馬町・口之津町方言はすべてタイプ PA 方言である可能性が高い。しかし、西有家町方言では、語幹末分節音が[-syl, +cor, -cont]でない動詞の「テ」に相当する部分すべてに[çi]が現れる。その意味で、西有家町方言は加津佐町方言よりも古

11 (21)では「適用領域」としているが、厳密には適用領域は(21a-d)の補集合である。

態を残していると言えるかもしれないが、両方言にこのような歴史的な関連性があるのか、それとも単にタイプPA方言の「テ」に相当する部分の[çi]が音声的に[çj]に弱化しただけなのか、現時点では不明である。また、南有馬町方言ではs語幹動詞だけに、「テ」に相当する部分に促音が現れる形が現れている。真性テ形現象の名残とも見られるが、詳細は不明である。さらに、有元光彦(2001b, 2004a)によると、雲仙市(旧南高来郡)小浜町・千々石町方言はタイプPA方言であることが判明している。

5. まとめ

島原半島方言を論じる際に、従来の研究では「北目」「南目」という術語で表されるように、北部と南部の違いが顕著であるとされてきた。しかし、本稿で取り上げたテ形現象に関しては、この違いはなく、島原半島全域で類似したタイプが観察された。即ち、おおよそ「擬似テ形現象方言のタイプPA方言」であると結論付けることができる。もちろん、タイプPA方言の“亜種”も、さらにはタイプPA方言の非テ形現象化が進行したタイプPD'方言のようなものも見られた。しかし、基本的にはタイプPA方言であると考えられる。

このように、記述的には、擬似テ形現象方言に新たな下位タイプを発見することにより、擬似テ形現象の下位分類が多少とも明らかになったと言える。従来の研究である有元光彦(2004a, 近刊)等で設定した「タイプPA方言」「タイプPB方言」「タイプPC方言」は便宜上のネーミングであった。下位タイプがあまり発見されていなかったのも、順にA,B,Cと付けていただけであった。実際は、「テ」に相当する部分に現れる音声の種類分布は、真性テ形現象方言のそれと対応するものであると考えられる。従って、本稿ではその対応関係が分かるようにネーミングをしたが、それによってほとんどの擬似テ形現象方言がタイプPA方言に属することが判明した。従来の筆者の研究で設定していた「タイプPB方言」「タイプPC方言」はネーミングを変更しなければならないが、それは擬似テ形現象方言の仕組みがもう少し明らかになってからにしたい。

一方、テ形現象に対する本稿の理論的貢献は“共生”タイプの発見とその定義付けである。ここでは(15)のような性質を仮定した。これはどの方言タイプどうしの“共生”が可能かに言及しているものであるが、データ不足のため現時点では暫定的でしかない。この問題は「歴史的変化の指向性」や「群仮説」等のテ形現象理論の構築に大きな影響を与えるものである。そもそも(15)のような性質が本当に成り立つのかどうかを検証するためにも、“共生”タイプの新発見が待たれるところである。

【参照参考文献】

- 有川郁代(2001) 「島原半島南端地域方言における動詞テ形について」 平成12年度安田女子大学文学部卒業論文(未公刊)
- 有元光彦(2000) 『「海の道」システム—九州西部島嶼部方言における動詞テ形現象—』 平成10-11年度科学研究費・奨励研究(A)「九州島嶼部方言における「海の道」の実証とその方言差の理論的研究」(No.10710262)研究成果報告書
- (2001a) 『「海の道」方言圏の可能性—九州西部地域方言の動詞テ形について—』 『筑紫語学論叢』 迫野虔徳編 風間書房 左pp.23-35
- (2001b) 「九州方言における動詞テ形の音韻規則」 『音声研究』 日本音声学編 pp.19-26

- (2002) 「2つの連続性と2本の「海の道」—九州西部諸方言の動詞テ形に起こる音韻現象—」『国語学』 国語学会編 pp.1-16
- (2003) 「九州西部・琉球方言の動詞テ形・タ形に起こる音韻現象についての試論」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第53巻 第1部 pp.67-80
- (2004a) 『九州西部方言における動詞「テ形現象」の記述的研究』 広島大学大学院社会科学研究科博士論文
- (2004b) 「「海の道」仮説と群仮説—九州西部方言・出雲方言の音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第54巻 第1部 pp.59-67
- (2005a) 「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005年9月号 明治書院 pp.74-82
- (2005b) 「熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第55巻 第1部 pp.1-14
- (近刊) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房

Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.

Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.